

種文学賞十一月

小学二～四年生の部「地の文をつくらう」

(内容：左記の課題文章を題材に、この場面までのあらすじを百字以内でまとめた上で、この文章に地の文をつける)

【課題文章】

「ねえ、おねがいがあるんだけど」

「なに？」

「これ、おじさんのところに届けに行ってくれない？」

「なにこれ？」

「わからないけど、すごく大事なものらしいよ。すぐに届けてほしいんだって」

「しようがないなあ」

「じゃあ、よろしくね。いってらっしゃい」

☆ 最優秀作品 (作者 小学四年生 女子)

【ここまでのあらすじ】

おじさんが千里の家に奥さんへの結婚記念日のプレゼントを忘れていたので、記念日当日、千里のママに電話でその箱を届けてもらおうと思ったのんだ。ただし、それがプレゼントだということは言わなかった。

ママは箱を届けようと思ったが、家が散らかっているのを見て、今自分は家の大掃除をしていることを思い出した。だから、千里に届けてもらうことにした。しかもそのとき、千里はマンガを読んでいた。まさうだったので、ちょうどよいタイミングだった。

「ねえ、おねがいがあるんだけど」

「なに？」

千里は興味津々に聞いた。多分、このひまな時間の中から逃げたかったのだろう。けれど、ママの言葉を聞いたとたん、シユンとなった。

「これ、おじさんのところに届けに行ってくれない？」

おじさんの家までは歩いて行かないといけないので、面倒くさいと思ったのだ。けれど、少し気になったので、箱の中身が何か聞くことにした。

「なにこれ？」

「わからないけど、すごく大事なものらしいよ。すぐに届けてほしいんだって」

千里はおじさんが忘れていったのが悪いのに、自分がまきこまれるのが嫌だったけれど、ママにはさからえないので、

「しょうがないなあ」

と行って、しぶしぶ玄関に向かった。ママは、千里が嫌がっているのも知らずに、

「じゃあ、よろしくね。いつてらっしゃい」

と軽い気持ちで見送った。

(以上)

☆ 入選作品①（作者 小学二年生 男子）

【ここまでのあらすじ】

今日ポンタはおつかいをたのまれた。おじさんにもつをはこぶことだ。でも、今日見たいテレビがある。ポンタはいきたくないと思っている。そのときちょうどお兄ちゃんがじゅくからかえってきた。

ポンタはおなかがいいたいふりをして言いました。

「ねえ、おねがいがあるんだけど」

「なに？」

ポンタは、小づつみをお兄ちゃんの前におきました。そして、

「これ、おじさんのところに届けに行ってくれない？」

と、おなかをおさえていました。

「なにこれ？」

と、お兄ちゃんは、ふしぎな顔で見つめて言いました。

「わからないけど、すごく大事なものらしいよ。すぐに届けてほしいんだって」

ポンタは、知らない顔をしていました。

「しょうがないなあ」

と、お兄ちゃんはめんどうくさそうに言いました。それをきいてポンタは、

「じゃあ、よろしくね。いつてらっしゃい」

どうれしそうにいました。

ポインタがやってほしいことをお兄ちゃんがやってくれたから、つぎはお兄ちゃんになにかしてあげたい  
と願っています。

(以上)

☆ 入選作品②（作者 小学四年生 男子）

【ここまでのあらすじ】

名無ななしの家に花の配達にきたおじさんが名無の箱の落とし物をした。そこで花屋のとなりに住んでいる名有なありにその箱を渡してもらうことにした。お母さんは子供たちが箱を開けないように大事な物だといって名無に渡した。

名無と名有がいつしよに下校しているときに名無はいました。

「ねえ、おねがいがあるんだけど」

「なにっ？」

名無はその名無の箱を名有にわたしました。

「これ、おじさんのところに届けに行ってくれない？」

「なにこれ？」

「わからないけど、すごく大事なものらしいよ。すぐに届けてほしいんだって」

名有はいつしゅんいやだと思ったけれどももっていけば花屋のおじさんになにかもらえるかもしれないと思いつきました。

「しょうがないなあ」

とおかしがもらえることをそうぞうしちよとニヤケながらうけとりました。そう言っているあいだにもう分かれ道まできました。

「じゃあ、よろしくね。いつてらっしやい」

と名無は手をふりながら走っていきました。箱をもどされたら自分かもっていかないといけなくなるので早くその場からいなくなりたいかったです。

名有は名無がなぜ走っていたのか不思議に思いながらも、おかしがもらえるかドキドキしながらかえりました。

(以上)

小学五〜中学一年生の部 「地の文をつくらう」

(内容：左記の課題文章を題材に、この場面までのあらすじを百字以内でまとめた上で、この文章に地の文をつける)

【課題文章】

「ねーえ、おねがいがあるんだけど」

「な、なんだよ」

「これ」

「あいちゃんのところを持って行ってくれない？」

「いや、自分で行けばいいじゃない」

「だってさあ…わかるでしょ。ね、たのんだよ」

「あ、おい、ちよっと」

☆ 最優秀作品 (作者 中学一年生 女子)

【ここまでのあらすじ】

K中学の一年二組の中で、ぶりっ子で嫌われている香織はクラス一美人なあいには嫉妬している。香織は「自分の方が可愛いことを認めさせる作戦」を立て、それを幼なじみだけれど香織のことが嫌いな結人に相談していた。

おととい、香織にLINEで相談を受けてから一度も話していない。いつあの作戦を実行するのかと  
思いながら、俺はお弁当を食へ終えた。そして、バレーボールをしようと外に出ようとしたときだっ  
た。誰かに肩をたたかれた。誰やねんと思いつつ後ろを振りむくと、そこに笑っている香織がいた。

「ねーえ、おねがいがあるんだけど」

急に話かけられ少し焦った。

「な、なんだよ」

あいつから話しかけてきたということは、あの作戦を実行する気になったのか。

「これ」

そういつて見せてきたのは封筒だった。すぐく派手で右下にはクマの絵がかいてある。だいたいこんな手紙を渡すのは女子だろう。封筒からも女子力を感じられる。あいちゃんに渡す手紙だろうと予想した。ん、まてよ、なぜおれに一回手紙を見せる必要があるんだ？渡し終わってからでいいのに。少し嫌気がさしてきた。そのうえ、他の人の視線も気になってきた。よりによって、香織と話している訳だから、何と言われるかわからない。はやく終わってほしいと腹がたってきた。

「あいちゃんのとこに持って行ってくれない？」

嫌な予感的中した。しかも、これは厄介なことになりそうだと感じた。

「いや、自分で行けばいいじゃない」

自分の怒りにまかせて言ってしまった。外で遊ぶ人の声がやけに大きく聞こえる。

「だってさあ…わかるでしょ。ね、たのんだよ」

あれだけ相談しておいて、あいちゃんに直接会うのが嫌になってきたのか。それよりも、はやくバレーをしいきたくてしょうがない。自分で行け、と再び言おうと思ったときに、香織ににげられてしまった。

「あ、おい、ちょっと」

もう手遅れだった。すでに香織は教室を出ていた。俺は教室のドアに向かって、派手な封筒を持ちながら数秒間、ぼうぜんとしていた。

(以上)



☆ 入選作品（作者 小学五年生 女子）

【ここまでのあらすじ】

妹の彩あやが同級生で友だちのあいちゃんとけんかをした。一週間後、彩はけんかのおわびの手紙を書いたけれど、照れくさくてわたせなかった。だから兄の裕樹ゆうきにわたしてくれるようにたのむことにした。

イヴの朝、裕樹が部屋で本を読むことに熱中していると、とっぜん耳もどで彩の

「ねーえ、おねがいがあるんだけど」

というささやき声が聞こえた。どうやら本に熱中していて彩が入ってきたことに気がつかなかったらしい。びっくりして顔をあげると、裕樹の顔のすぐ前でささやいていた彩と鉢合わせをしてしまった。

「な、なんだよ」

ぶつけた額をおさえながら聞くと、彩は耳のはしを少し赤らめて、せにかくしていた物をだした。

「これ」

さし出された物を見ると、少しピンクがかかった黄色のふうとうだった。表にあいちゃんへと書かれて  
いる。

「あいちゃんのとこに持って行ってくれないっ」

どうして自分でいかないんだ。そう思っているうちに思い出した。そういえば彩は数日前あいちゃんと大げんかをしたのだった。でもその手紙を持っていくのは気が引けた。

「いや、自分で行けばいいじゃない」

けれど彩は引きさがらない。

「だってさあ…わかるでしょ。ね、たのんだよ」

しびしび顔をしながら、確にんのつもりで、口の動きだけで、け、ん、か？と作ってみた。けれどこのしびしび顔がいけなかったらしい。彩は顔を赤くしてうなずくや、裕樹のひざの上に手紙を置くと、ぱつと部屋からとびだした。

「あ、おい、ちょっと」

あわてて部屋から出て見ると、彩はもう階段をかけおりにいた。

(以上)